

桜蔭俳話会 四月句会 (第二九四回) 桜蔭会館

平成二十三年四月二十四日

- 3点② 逝く春や思考停止の解けぬまま 守 ゆつたりと鯉の群れ過ぎ春の川 友子
- 3点 泥つきしランドセル抱く春悲し ヤエ子
 亀鳴くやひとりベンチの昼弁当 ヤエ子
 ① 被災地のさくらいつもの通り咲く 友子
 ① 春の大地揺がして家族崩したり 溪水
- 2点 街灯の節電シート春疾風 秀一
 晩霜や丹沢山系くつきりと 貞勝
 警官の昼の交代花の門 秀一
- 1点① 混沌のなかの未来や春の雪 守
 ① 春風のまぶたを軽く通りすぐ 眞三
- 1点 アライグマ威嚇の双手春の土 幸
 鳥雲に入りて「マケズ」と賢治の詩 貞勝
 里ざくらのほどけそめたる昼の月 秀一
 花時計蝶の接吻きりもなし 貞勝
 靴脱いでベンチの読書若葉風 秀一
 碧空は正に碧空辛夷咲く 溪水
 海苔の香や今日始まりの朝の膳 ヤエ子
 五千本の満開の桜に富士晴れて 幸
 桜貝探す少女にさざら波 貞勝
- ※ 東北の底力見ゆ初桜 友子
 春深し気付けば口に唱歌あり 溪水
 花七分満つ楽しみの並木かな 眞三
 原子炉の水の重圧揚雲雀 守
 植木師の摘む松の芯島晴るる 友子
 メタセコイア三角形の芽吹きかな ヤエ子
 杏咲き安堵の色こそ光あれ 貞勝
 シート敷き若き家族の花見かな 眞三
 未曾有の災害春の海遠し 幸
 仏頭の豊かな笑や春の暮 溪水
 花吹雪おにぎり持つ手にふりかかる 溪水
 一日に一度の募金暮の春 守
 篤姫の陣宿への道恋の猫 幸
 晩春や埃まみれの靴洗ふ 秀一
- 発電機つなげてみたし風車 守
 名園の松のうすしや春の景 眞三
 地震のことなかりしごとく花うかぶ 眞三
 筆一気画布の輝き花ミモザ ヤエ子
 突如鳴る携帯電話花冷ゆる 友子
- 不在投句 (野上貞勝、岩野ヤエ子)